

B地点はA地点から尾根を越えた浅い谷地で標高は190m、枯死して半ば朽ちたハチク林の跡である(図2)。ハチクは、2016年に生嶋が成ヶ島で開花を確認しており、本自生地でもその頃には開花・枯死が始まったと推測される。ツルギキョウは数群に分かれていることを確認しており、A地点の数~5倍ほどの個体数があると推定される。生育地へ近づくには、倒伏したハチクの上を歩く必要があるため、かなり労力がある。現地に近づくのが困難なため、いまだ群数・個体数の正確な把握はできていない。なお、双眼鏡による調査では数群が生育するだろうと推定された。

地質は花崗岩で、生育地の林床は明るく、倒伏したハチクの間にイワヒメワラビが群生し、ヤナギイチゴ、マタタビ、フウトウカズラ、ヒメコウゾ、タラ、クサギ、ニワトコ、アオキ、ボタンヅル、ヘクソカズラ、サネカズラ、アカネ、クサイチゴ、ツルニンジン、シュウブソウなどが混生していた。ここのツルギキョウは発育が旺盛で大型のイワヒメワラビに絡んだり、互いに絡み合って密なマント群落を形成していた。競合していた種は、ボタンヅル、ヘクソカズラ、アカネであるがツルギキョウが優勢という印象を受けた。

二つの自生地に共通な種として、フウトウカズラ、ヤナギイチゴ、マタタビなどがあげられるが、それらもツルギキョウと同様に谷筋の湿潤な環境を好んで生える植物と思われる。



図1 ツルギキョウの生育地 (A地点)



図2 ツルギキョウの生育地 (B地点)



図3 ツルギキョウの花 (B地点) (10月29日)

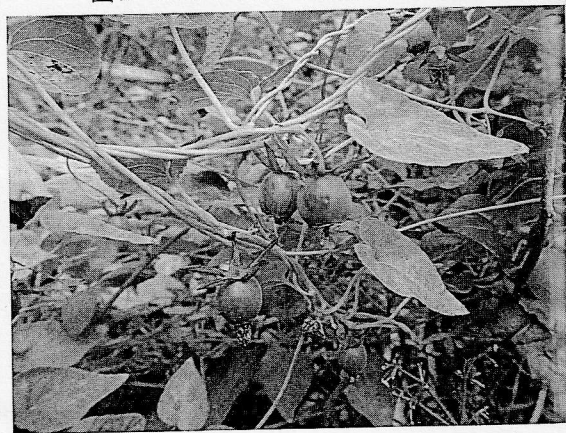


図4 ツルギキョウの果実 (B地点) (10月29日)

2 ツルギキョウの開花結実時期

ツルギキョウは一見すると、スズメウリに似ているが、巻き蔓がなく、赤紫色の果実をつけるので見分けられる(図3, 4)。ただ、花の時期は花が地味であるので、多くの花をつける割には意外と見つけにくい。

2022年9月23日と10月2日の調査では花と蕾はみられたが、赤紫色の果実は確認できなかった。同年10月29日には蕾、花と一緒に、赤紫色の果実も確認された(図4)。こうして10月下旬には赤い果実が目立つようになるので容易に本種を同定できるようになる。この頃が標本採集の適期と思われる。これまで行った3回の観察から、開花時期は9~11月、結実時期は10月下旬~11月(12月?)といえそうだ。